

多田南嶺と絵本

神谷勝広

はじめに

多田南嶺（二六九四―一七五〇）は、神道・有職故実の学者である。京・大坂を中心に活躍し、大和郡山・伊丹・伊勢路・尾張・江戸などでも講義を行う。こうした本業での活動に加えて、様々な文芸にも手を染め、浮世草子・役者評判記・劇書の代作を行い、和歌・俳諧・漢詩文なども作る。活動的で多面的な文化人といえる。

さらに晩年、南嶺は絵本の文章も担当する。具体的には、

- ①延享三年（一七四六）刊『絵本西川東童』
- ②延享五年（一七四八）刊『絵本花の鏡』
- ③寛延二年（一七四九）刊『絵本福祿寿』
- ④宝暦三年（一七五三）刊『絵本雪花』

の四作品である。なお、南嶺の関与した絵本がもう一作品あったと

推測される。『絵本置而來草』は広告などで「隨時老人作」（隨時は南嶺の別号）とする。ただし、現存不明である。

これまで、南嶺と絵本の関係は、あまり注目されてこなかった。以下、具体的にその状況を確認する。

一 『絵本西川東童』

南嶺は、『絵本西川東童』（半紙本・三卷三冊）では序だけを書いてたと見なされてきた。確かに、序からはそのように読める。

絵本西川東童序

あづまわらはは官女の号それは都これは東路のさのみさがし求るにはあらで反古さらへし中よりふるくあたらしき人々のこと葉の玉も石もかしはの名のかはらぬ千代のためしに拾ひあつめたりと絵にそへたる草紙をたづさへ来り予が旅亭に請ふは序な



『絵本西川東童』（架藏 再版本）

多田重章の絵本

らんとみなまではさず筆にまかすもすなはちとに童情と
 やいはん正月より十二月にいたるまでの子供わざ見るにつけて
 もむかし恋しや

京 南嶺翁 印

『絵本西川東童』は、これまで再版本しか知られてこなかった。再
 版本刊記は、「画工 洛陽文華堂西川自得叟祐信／明和四年亥正月
 吉日／京都書林 寺町通松原下ル町菊屋喜兵衛求板」とあり、南嶺
 のことは何も書かれていなかった。したがって、南嶺の関与が明瞭
 ではなかったのである。

ところが、最近、山本卓氏が初版本を所蔵されていることを明ら
 かにされた。その初版本刊記には、「作者 南嶺翁／画工 西川自
 得叟祐信／彫刻 石原半兵衛／延享三年寅正月吉日／江戸大伝馬三
 町目鱗形屋孫兵衛／京麩屋町誓願寺下ル町八文字屋八左衛門板」と
 ある。これによって、南嶺が文章を担当したことは確定できた。

①では改めて、『絵本西川東童』の内容だが、四季の子供遊びを描
 いたもので、各図には、狂歌・狂句を収め、作者の短い紹介も附し
 ている。画題と作者（及び説明）は、次のようになっていいる。

丁付と画題	作者	年齢	説明	読者
上3才4ウ初ゆめ	志賀随翁	百八十歳	大坂人凡式百歳ちかく	志仙
		まで長寿めでたき人ゆへ巻頭に		京の人江戸に來り本町辺にあそぶ
		おく		読人不知
		14ウ15才やぶさめ		
		13ウ14才ひいなまつり		
		13才	にはとり合	東嶺 本名坂上与次右衛門とて撰州山本村に住世に山崎与次兵衛云
		12ウ	のぞき	大坂あづま 京やの傾城山本の与次右衛門妻と成
		11ウ12才春駒		貞徳 松永氏
		9ウ10才初午		道灌 武門に名あり
		9才	いかのぼり	よみ人不知
		8ウ	とりおひ	船戸 難波の勾当初は近都といふ
		8才	まめまき	重頼 維舟ともいふ貞徳の高弟なり
		7ウ	やくはらひ	春助 近年古物の茶碗をまねて陶る上手也
		7才	はごいた	可寧 尾州の人歌に功あり
		6ウ	まり	西鶴 はいかい師よみ本の作者
		5ウ6才馬乗始		祐雅 洛外東山の人名たかし
		5才	福引	空存 天満の人隠逸の名高し
		4ウ	まんざい	紹鷗 泉州堺の人茶道の元祖なり
				守武 伊勢の神職にして貞徳の門人

15ウ いもむし遊び 読人不知
 中3オ なのは船 孫六 美濃関の名鍛冶
 3ウ こまどり 読人不知
 4オ よしの、花 宗鑑 歌学にも連俳にも名高し
 4ウ 釣たれる 読人不知
 5オ せうぎ 木食上人
 5ウ6オかぶと人形 正虎 信長公の祐筆なり
 6ウ 子供あやつり 天津和尚 黄檗宗歌学に名あり
 7オ さうりかくし 鬼貫 伊丹酒屋後に士と成上嶋氏なり
 7ウ8オ富士参り 素勇堂 江戸の人
 8ウ9オ天王御祭礼 作者不知
 9ウ 両国花火 其磧 江嶋氏よみ本作者宗恵と云
 10オ びいどろへふなを入れる 卜養 堺の人狂歌集板にあり
 10ウ11オ七夕まつり 平安 近松門左衛門と号す本国越前中
 比京家につかへ浄るり作者と成
 11ウ 女子琴をひく 光琳 緒方氏一流の画に名高し
 12オ とんぼうつる 立圃 はいかい絵に名あり
 12ウ とうろう 馬勃 当時江戸の宗匠
 13オ むしうり かぢ ぎをん水茶やの女かぢの葉とて

歌の集板にあり

13ウ14オ町中をうたひありく体 蝶花 本名岸田半七贅沢先生と号す
 14ウ はちの巢かはず 来山 俳人
 15オ 貝勝負 作者しらす
 15ウ めんあそび 東行 俳人
 下3オ てうちんのかげ 読人不知
 3ウ4オ月見 東行 俳人
 4ウ5オ芝居のまね 山三郎 中古美男の聞えあり
 5ウ6オはやし小まひ 曾路里 天正の比の人
 6ウ7オ花すまふ 夫木集 此歌作者不分明
 7ウ8オ放生会 松花堂 八幡の人絵も歌も世に名高し
 8ウ9オ神田明神祭 読人不知
 9ウ 大かぐら 了海 浄土門に名ある僧なり
 10オ きくむしり 都錦 本名宍戸与市後に都錦と改
 10ウ11オほたけ 万々 渡辺弥太郎多田の人
 11ウ12オはかまぎ 長慶 三好修理太夫
 12ウ13オ雪遊び 淡々 松木氏後杜三楊と改文集世に行
 13ウ14オ餅花 日近 梶折の上人と号法花宗なり

右の作者たちは、歴史的な著名人、南嶺と同時代に活躍した文芸関

係者、南嶺と同時代の文芸関係者ではない者、経歴未詳の者など、様々いる。歴史的な著名人が入っていることは自然なことで、特に問題とする必要もなからう。また、経歴未詳の者は、手がかりがないので何とも判断のしようがない。

では、南嶺と同時代に活躍した文芸関係者、また南嶺と同時代の文芸関係者ではない者、彼らはいかなる人物たちなのか。

まず、南嶺と同時代の文芸関係者（鬼貫・素勇堂・其磧・平安・渭北・馬勃・東行・淡々）について見てみよう。

「鬼貫」は、伊丹俳諧の中心人物である。南嶺は自分の執筆した浮世草子・役者評判記の中で彼を何度も登場させている。鬼貫は落飾して即翁ともいった。南嶺の浮世草子『花櫻巖柳鳴』（元文四年刊）三之巻の一に見える「即翁が金字の亀」は、それを意識したものであろう。また、南嶺が編集に関与した役者評判記『役者大極舞』（同年刊）江戸之巻開口部にも「即翁ぬいの鹿子の中着」とある。南嶺は、伊丹の北隣大鹿に住んだことがあり、伊丹に人脉もある。鬼貫を意識しているのはそのためかも知れない。「素勇堂」は、江戸の俳諧師米仲の延享二年歳旦に出てくる「素勇」であろう。同じ歳旦には南嶺も一句入れている。南嶺は、素勇が属していたと思われる江戸座の米仲のグループと交流がある。南嶺は、江戸へ行つたことがあり、江戸在住の弟子も持っていたから、素勇とも直接的

な関わりがあったと見なすべきであろう。「其磧」は、言わずと知れた八文字屋の浮世草子作者である。南嶺と其磧がまったくの没交渉とは思われない。「平安」は、著名な近松門左衛門である。南嶺と面識があれば興味深いが、未詳である。「渭北」は、江戸座で活躍するが、元々は太坂の淡々の弟子であった。つまり、南嶺とは同門の関係になる。「馬勃」も、米仲の俳諧仲間である。南嶺と交流があったと推測できる。馬勃も南嶺の浮世草子『教訓我儘言』（寛延三年刊）三之巻の三に名前が見える。「東行」は、宝永二年（一七〇五）刊『東行撰集抄』を著した俳諧師と思われるが、彼も南嶺の浮世草子『大系図蝦夷噺』（延享元年刊）二之巻の二「庵号も東行庵と名づけ」、同『教訓我儘言』（寛延三年刊）三之巻の二「東へゆけばとて東行法師と名づけ」などと登場する。ただし、南嶺との関わりははっきりしない。「淡々」は、南嶺の俳諧の師匠にあたる。南嶺が淡々をモデルにした話が、寛延二年刊『役者大雛形』京之巻開口部に出てくる。内容は、淡々に失礼といわざるをえないものが、それもまた気を許しあった間柄ゆえの悪ふざけであろう。

南嶺と同時代で文芸関係者以外の者（あづま・東嶺・天津和尚・蝶花・日近・了海）は、どのような人物たちなのか。

「あづま」「東嶺」は、西鶴の『好色一代男』・近松の『山崎与次兵衛寿の門松』などでもモデルになっている著名人であるが、彼ら

のことを南嶺は浮世草子でも取り上げている。また、南嶺が編集した『古今役者大全』（寛延三年（一七〇五）刊）に「坂上与次右衛門」といふは世にいふ山崎与次兵衛事也」ともある。「あづま」「東嶺」と南嶺の関わりは判然としないが、南嶺が強く意識していたことは明らかと言える。^②「天津和尚」は、池田の蔵元の出身で、南嶺とは親しい。他界した直後の浮世草子『忠盛祇園桜』（元文五年刊）では重要な登場人物のモデルにしている。南嶺は哀悼の気持ちがあったと思われる。^③「蝶花」は、本名「岸田半七」。南嶺の浮世草子『忠盛祇園桜』一之巻の二に「天明暦にいわく、北忠が膝を揺る癖も、蝶花が贅言に如ずとかや」、『龍都俵系図』（元文五年刊）二之巻の二に「天陽の蝶花は、下に縫泊を襲て、肩を脱癖にくるしみ、北卿の槽明暦は、天命を思はず、少して眼鏡を楽む病あり」、『契情太平記』（延享元年刊）三之巻の三に「林和常は画に隠れ、岸蝶花は贅にのがる、其跡異なりといへ共、其婦一なり」、南嶺が関与したと思われる役者評判記『役者忠宝参』（元文五年刊）大坂之巻開口部に「ひしだや半八と云せんしやうもの」などと出てくる。南嶺の個人的な人脈の中にいた人物と推測される。「日近」は、梶折の上人と呼ばれた大坂住の僧侶であるが、『教訓我儘育』一之巻の二に「吉弥十六歳のむかし、梶浦の日願上人といふ説法者に買れて、むつごとの間に間に法華の功力他にすぐれたるわけを聞かれ」と書

かれており、やや気の毒な気もする。南嶺との直接的な関係ははっきりしない。「了海」は、浄土宗の僧侶で、日蓮宗を攻撃した談義で当時知られた人物であるが、残念ながら、南嶺との関わりはわからない。

以上を踏まえれば、南嶺と同時代の者たちの中に、南嶺の個人的人脈の中から選出された者が少なくない。加えて、時期・経歴が未詳である「万々」も「渡辺弥太郎多田の人」とあることから、南嶺と同郷人であり知人であった可能性が高い。南嶺は、個人的人脈を自己の作品に反映させることが、浮世草子・役者評判記にあった。ここでも同様の傾向が見出せたことになる。

なお、絵本における作者南嶺と画工祐信の関係だが、南嶺が先に文章（狂歌・狂句）を決め、その内容を踏まえて祐信が絵を描いたと推測する。例えば、「はやし小まひ」の狂句は「曾路里」作とし「袖ともにさすや扇の月の笠」というものである。絵でも子供が月を描いた扇を持って舞っている。絵が先であって、それに適合する狂歌あるいは狂句を見つけたことは困難であろう。逆に、狂歌・狂句が先に提示されていて、それに合わせて絵を描くのなら、これは容易である。また加えて、絵の内容に沿った狂歌・狂句を南嶺の知人のものからの確に選択することは選択の範囲があまりに狭く、きわめて困難と思われる。南嶺と祐信の関係において、南嶺が書い

たものに祐信が合わせて描くことは、浮世草子作成でずつと行われていた。したがって、右のような連携は、南嶺・祐信の両者にとつて、特に問題となるようなものではなかったであろう。

二 『絵本花の鏡』

延享五年刊『絵本花の鏡』（半紙本・三卷三冊）刊記部分は、「作者 随時老人／画工 西川自得叟祐信／彫工 石原半兵衛／延享五歳辰正月吉日／江戸大伝馬三丁目鱗形屋孫兵衛／大坂高麗橋二丁目山本九右衛門／京麩屋町誓願寺下ル町八文字屋八左衛門板」となっている。

さて、『絵本花の鏡』の内容は、各風俗図の中に掛軸・屏風・衝立・襖などを画き、その画題の説明文も附す。説明文にはいろいろな故事が組み込まれている。『絵本花の鏡』の特徴は、風間誠史氏『多田南嶺集』（叢書江戸文庫42 国書刊行会 一九九七年五月）解題で適切にまとめられている。

本作は画中に画を配し、その内外の画が見立て風に対応するという手の混んだ仕掛けになっており、画だけでも文章だけでも成り立たない。八文字屋の出版に長く係わった二人が意匠を凝らした作と言えよう。南嶺の文章について言えば、本作は彼の学殖・博識がよく發揮された内容だが、中には彼の浮世草子を

連想させる記事も見える（能因法師をまねて自宅に籠もつて旅の歌を作る男の話は『大系図蝦夷噺』巻二二と全く同想）。

確かに、『絵本花の鏡』は、南嶺の「学殖・博識」が發揮された作品である。具体的には、故事に関するこだわりが強い。南嶺は、有職故実の学者であり、故事来歴に関しては非常に詳しく、知識も多い。『南嶺子』『千加屋草』『蓴菜草紙』などの故事を集積した書も編纂している。故事に特別な執着を持っていることは、南嶺の特徴なのである。

『絵本花の鏡』と南嶺の他の著述で故事が一致することはいくつも見出せるが、一例をあげておけば、『絵本花の鏡』に見える歌舞伎の起源に関する故事「歌舞妓の狂言はもろこしにて孟優に始る、是漢の人なり、もろこしにて実役を採子といひ、敵役を擬悪といふ、若女形を燕君子といふ」といったくぐりには、『古今役者大全』「役者の始まりの事」の「漢に趙飛燕が名曲あり、唐に至て散楽数十種、皆以て奏覧す、その部に戲優ありて、古今の治乱を狂言綺語にあやなして、其発頭を孟優と号し」と一致する。この故事は、南嶺が特にこだわっていたものと推測できる。南嶺が関与した作品以外では、役者の始まりに関して右の故事を持ち出すものを見ない。

三 『絵本福祿寿』

寛延二年刊『絵本福祿寿』（半紙本・三卷三冊）の刊記部分は、
「撰者 随時老人南嶺／画工 西川自得叟祐信／彫工 石原半兵衛
／寛延二歳巳正月吉日／江戸大伝馬三丁目鱗形屋孫兵衛／大坂高麗
橋二丁目山本九右衛門／京麩屋町誓願寺下ル町八文字屋八左衛門
板」とある。

『絵本福祿寿』の内容は、事物起源・故事来歴を述べ、その末尾
に狂歌・狂句を附ける。

狂歌・狂句の作者たちは、西鶴・道寸・猪同・由南・貞隆・一
中・保友・錦文流・来山・鮎久・板坂法印・明珍信家・重頼・板垣
信形・維舟・観舞翁・立甫・都錦・山中鹿之助・才磨・三千風・団
水・名倉柳庵・水閑・桐輔・道寿・由平・一傘・その女・一之・止
禿翁・ト養である。これ以外に、鳥山輔寛の名が文章の中に出てく
る。

（ここでも南嶺の個人的人脈の反映がうかがえる。

南嶺と同時代の文芸関係者（鮎久・猪同・鳥山輔寛）は、次のよ
うな人物たちであった。

「鮎久」は、伊丹の俳人である。南嶺は伊丹に人脈を持っていた
ことからすれば知人であったと思われる。「猪同」は、歌舞伎作者

中田嘉右衛門の俳号である。南嶺の編集した『古今役者大全』『狂
言作者の事』に「大坂に中田嘉右衛門、俳名猪同といひしは」など
と出てくるが、南嶺との直接の関係は未詳。「鳥山輔寛」は、芝軒
と号した漢詩人で、南嶺は彼から漢詩文の教えを受けた。

南嶺と同時代で文芸関係者以外の者（名倉柳庵・道寿・桐輔）の
中にも南嶺の知人がいる。

「名倉柳庵」は、伊勢の津の医者で、南嶺の友人。その子息とも
交流があった。伊勢神宮を南嶺が訪れた際には、途中、逗留してい
る。「道寿」は、坂上宗清のことであろう。人名の前に「大鹿山」
とあるのは、伊丹の北隣の大鹿（現在は伊丹市内）を指すと思われ
る。また狂句も「花も桃我も百とせ山かつら」である。したがって、
道寿は、大鹿に住み、百歳を越えていないといけない。この条件に
合うのは、宗清しかない。道寿は宗清の号なのであろう。宗清は、
坂上一族（伊丹俳人蜂房などを含む）の長老で、大鹿に住住し、享
保十八年に百歳を越え、京都の公家近衛家から祝を受けている。南
嶺は享保九年から十一年ころに大鹿に住んでいた経験がある。宗清
とは面識があったはずである。「桐輔」は、大坂の長寿の儒学者で、
享保十六年に百十六歳で他界した。残念ながら、現段階で南嶺との
関わりははっきりしない。

また、『絵本福祿寿』は、故事来歴を含んでいるので、故事に対

する執着もはつきりうかがえるが、他の南嶺作品と合致するものも少なくない。二三例をあげれば、『絵本福祿寿』に見える「朝鮮は布粟を以市をたて、暹羅は海の貝を以市をたて、日本は漢唐の銭を以市をたつるよし」は、『自笑楽日記』（延享四年刊）二之卷の三に同内容の故事が出てくる。『絵本福祿寿』の「盲人に紫衣をゆるさる、事は、後小松院の御時源照といふ盲人」は、『世間母親容気』（宝暦五年刊）一之卷二に同じ故事が出てくる。『絵本福祿寿』の「漢武帝の時東方朔を召れ寿百歳なるものは人中一寸といへり弥その通かたとつね給ふ時、東方朔手をた、きわらふ」も、『大系図蝦夷噺』（延享元年刊）卷一の一や『教訓我儘育』（寛延三年刊）五之卷の一や『役者懐中曆』（元文六年刊）大坂之卷開口部に同様の故事が見える。

四 『絵本雪月花』

『絵本雪月花』（半紙本・三卷三冊）の現存諸本の刊記には、「作者 随時老人南嶺子／画図 西川自得叟祐信／明和五年子正月吉日／京都書林 寺町通松原下ル町菊屋喜兵衛求版」とあって再版である。初版の刊行時期は、『享保以後江戸出版書目』の「同（絵本）雪月花 全三冊／墨付三十四丁／同（宝暦）三酉正月 石川筆／板元 京八文字や八左衛門／売出 鱗形や孫兵衛」から推定できる。

さて、『絵本雪月花』の内容は、上巻が花、中巻が月、下巻が雪にそれぞれちなんだ故事を引き、句・歌を添えて、それに対応する当世風俗絵を描く。

登場する作者たちは、逍遙院・後醍醐天皇・大立・渭北・百丸・卜陽・維舟・素勇堂・団水・随時翁・垂水広遠・肖柏・桐麿・空存・尾州落合氏・藤香君・昌俊・冬房・貞隆・西鶴・又甫・日尋・心齋・尼子義久・来山・半時庵・春山・十楽庵・宗祇・郷麿・一巴・芭蕉・南行・丈山。

『絵本雪月花』でも、南嶺の個人的人脈の反映は指摘できる。

南嶺と同時代の文芸関係者（大立・渭北・百丸・半時庵・春山・郷麿・桐麿）について述べよう。「大立」は、才麿系の俳人で、南嶺との関係は残念ながら未詳である。「渭北」は、前述のごとく、南嶺と俳諧の同門。「百丸」は、伊丹の俳人で、南嶺『桂花抄』（写本）にも名が見え、南嶺と知り合いである可能性が高い。「半時庵（淡々）」は、南嶺の俳諧の師匠。「春山」は、堺の僧侶で、武者小路実陰の和歌の門下である。南嶺は実陰と関わりがあるので、その縁があるろう。また淡々系の俳書に出てくる「春山」も同一人物か。そうであれば、親しい間柄であろう。「郷麿」は、才麿門の俳人ながら、鳥山芝軒（佐太夫）の弟子でもある。つまり、漢詩文で南嶺とは同門になる。郷麿に関しては、興味深い資料がある。柿衛文庫

蔵の郷磨短冊裏書きに、「大坂天満材木同心戸田治部八、詩人鳥山佐太夫人旧徳弟子」とある。本名「戸田治部八」が目目される。南嶺の代表作『鎌倉諸芸袖日記』（寛保三年刊）三之巻二に「樺之進念頃なる浪人、戸田治部八といへるをたのみけるは：黒やきにしたるいひわけを、嘘八百にやつてのければ」と、いい加減な人物として登場する。親しい友人ゆえに、南嶺は郷磨（戸田治部八）をかからかっているのだろう。「桐磨」は、才磨門の俳人五彩堂矩州。南嶺との面識の有無はわからない。「随時翁」は、南嶺本人の別号である。

南嶺と同時代で文芸関係者以外の者は、『絵本雪月花』に見えない。ただ、経歴などまったく未詳であるが、「尾州落合氏」は、南嶺の名古屋における人脈の反映ではないか。南嶺は、尾張藩の重役とも付き合いが深い^①。当時の尾張藩重役で落合の姓を持つ人物がいる。今度調査してみたい。

また、故事に対する執着も、多くの故事を作中にちりばめていることから明白だが、『絵本雪月花』に見える「吉野山」の故事などは、南嶺の他の著述（『秋齋問語』『千加屋草』）にも見える。

五 まとめ

南嶺の多面性は、これまでも周知のこととは思いますが、今回、絵

本の文章担当者という面を明瞭にしたことで、一層はつきりできた。しかし、同時に、浮世草子・役者評判記に見られた南嶺の特徴（個人的人脈の反映・故事への執着）も確認でき、南嶺の個性が改めて強いこともわかった。

すなわち、多面性と固有性を同時に合わせ持つことが、南嶺の特徴ではないだろうか。

注

① 『関西大学図書館影印叢書 西川祐信集下巻』（関西大学出版部 平成十三年三月）の山本卓氏執筆の解題十七頁参照。

② 拙稿「西柳こと山本与次兵衛」（連歌俳諧研究）九八号 平成十二年二月

③ 拙稿「多田南嶺と天津禪師」（京都語文）七号 平成十三年五月

④ 拙稿「多田南嶺と尾張」（『東海近世』十二号 平成十三年五月）

〔付記〕

本稿は、平成十六年度日本文学協会研究発表会（於仏教大学）での口頭発表に基づく。席上、多くの御教示をたまわったことに深謝いたします。